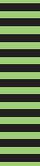


歯科衛生士口演

(C会場)

C 会 場

HO-01~02



10月25日 (金) C会場 9:50~10:10

HO-01

歯周治療におけるマイクロスコープ（歯科用実体顕微鏡）と歯科衛生士との関わり

佐藤 由美

キーワード：マイクロスコープ（歯科用実体顕微鏡）、歯周基本治療、患者動機付け、歯周病組織検査、メンテナンス時の口腔内診査

【背景・目的】 歯科衛生士業務の中での歯周病治療は、口腔内診査及び歯周病組織検査から始まり歯周基本治療に移行していく。しかし診査及び治療時に肉眼及び拡大鏡では、不適合修復物やプラークの付着などの状況を術者は確認出来たとしても、患者への情報提供が困難であることが多い。また、根面形態や根面性状を考慮した緑下歯石除去の際は手指感覚に頼る事が現状である。そこで拡大明瞭視野下及び記録装置を備えているマイクロスコープを使用した。

【方法】 マイクロスコープ下にて口腔内診査及び歯周病組織検査時、記録装置にて動画として保存したものを画像及び動画にし、担当医、患者に提示をする。TBIでは大画面にて、患者にプラークの付着状況や正しいブラッシング法をマイクロスコープで撮影したものを動画で患者に視覚的に見せる。

【結果】 TBI時の媒体としても、プラークコントロールの重要性を視覚的に訴えることにより、患者は短時間で理解することが出来、患者自身反応も良好だった。特にメンテナンス時では、経過観察中の病態を担当医、歯科衛生士及び患者が状況認識を共有し、後に治療を要するような疾患に移行しても大きな画面で示し納得度合いが高く、患者と歯科医院とのより良い信頼関係の構築を築くことができた。

【結論・考察】 マイクロスコープは、歯科衛生士にとって歯周病診査及び治療時、明るく拡大視野なので、瞬時に状況を理解的確に治療を行うことが出来る。また、見えることによりオーバーインストルメンテーション等を回避し技術の向上や、患者に説明する際にも視覚的に情報を提供出来ることで病態の改善にも繋がる。

HO-02

周術期口腔機能管理患者のセルフケア状況とその関連要因

有水 智香

キーワード：周術期口腔機能管理、かかりつけ歯科医院、口腔衛生指導

【はじめに】 近年、病院歯科では誤嚥性肺炎等の術後合併症予防を目的とした周術期口腔機能管理が導入されている。当院では、術前の口腔衛生指導時にハブラシと口腔ケアセット（歯間ブラシ、タフトブラシ、スポンジブラシ）の使用法を指導しているが、実際の使用状況は不明であった。今回、術後往診時の問診から、その使用状況を調査し関連要因を検討した。

【方法】 対象は、当院で周術期口腔機能管理を行った患者95名とした。評価項目は、術前のカルテからかかりつけ歯科医院、メンテナンス及び口腔衛生指導経験の有無、歯数、口腔衛生状態（PCR）を取得した。術後往診時に聞き取りを実施し、術当日のハブラシと口腔ケアセット使用の有無を目的変数とし2群に分類して評価項目との関連を調べた。統計解析は、カイ二乗検定及びマンホイットニーU検定で行い有意水準5%未満とした。

【結果】 調査可能であった患者は90名（男性56名、女性34名、年齢 67 ± 12 歳）。ハブラシと歯間ブラシの使用率は、かかりつけ歯科医院や口腔衛生指導経験の有無で有意差を認めなかった。一方、タフトブラシの使用率は口腔衛生指導経験の有無と有意差を認め（有66%／無34%）、スポンジブラシ使用率はかかりつけ歯科医院の有無と有意差を認めた（有82%／無52%）。

【考察】 タフトブラシやスポンジブラシは、口腔衛生指導経験やかかりつけ歯科医院の有無により使用率に有意差を認めた。日常に浸透していない口腔ケアセットを当院で術直前に指導しても実際には使用されていない実態があり、口腔衛生指導内容の見直しや、かかりつけ歯科医院との連携と患者への啓発を強化していく必要があると考える。